

10月31日(日)、コロナ禍のために一度延期された、なみはや教会の堅信式が行われた。受堅者は5人。

非常事態宣言中、堅信に向けた勉強はほとんどZoomを使用して行われた。ネットという新たなツールを用いることができたのは大きな収穫ではあったが、ミサでのみ得られる「信仰者としての交わり」の体験不足は否めない。これをどのように克服していくかが今後の課題といえる。

以下、主司式の酒井俊弘補佐司教の説教より。「一生に一度しか受けられない秘跡の式は(厳密にいうと)『洗礼式』と『堅信式』。この二つは靈魂に“しるし”を刻むからです。目に



受堅者、代父母、家族、司式者と記念撮影

なみはや教会堅信式



は見えなが神様から見たらわかる消えない“しるし”。

「堅信を受けるとはどういうことでしょうか。一人前の信仰者になること。誰かに言われなくても、あるいは強制されなくても『これがいい』と自分が信じていることを(たとえ嫌なことであっても)できる人になることでしょう。誰かに対して『祈っているよ!』と声をかけること。そして本当に祈ること。いろいろなことを耳にするとときに、私たちは『祈る』という手段を知っています。私たち信者にとって非常に強い武器です。これからはそれをたくさん使って、神様にも周りの人にも喜ばれるような信者になっ



7月26日(月)、起工式が行われた和歌山紀北教会(屋形町聖堂)。工事は現在、工程の4割まで着々と進んでいる。起工式の報告を紹介し、祈りと支援を願う。

当日はエム設計(株)代表、松井建設(株)の大阪支店代表、教区事務局職員、幼きイエズス修道会・愛徳姉妹会のシスターたち、和歌山紀北教会の信徒約40人が参加。連日の猛暑もあり、式典は信徒会館仮聖堂で行い、土地は主司式の酒井俊弘補佐司教が敷地内を一巡し聖水で祝福された。

1953年11月に献堂された屋形町教会聖堂の耐震工事が難しいとのこと而建替えとなった。5月2日、聖堂お別れミサを行い、6月7日から解体工事が着

工。2022年5月31日竣工予定となっている。

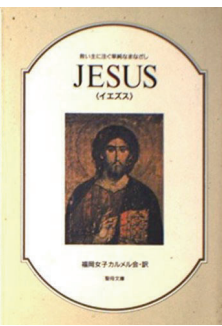
参加者の声

「司教様の説教中の『教会の土地・土台には私たち信者の先輩方の信仰が積み重ねられている。その上に建物・教会が建てられていることを忘れてはいけない』という話が心に残りまして。和歌山市は近年市街地の活性化を進め、若者の流入が予想されます。和歌山城の東に位置する新聖堂もその一役を担い、宣教の拠点となると信じています」。



司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は井田明神父様(吹田教会、レデンプトール会)が担当。

井田明神父からこの一冊



『JESUS (イエズス) 救い主に注ぐ単純なまなざし』(訳・福岡カルメル会、聖母文庫、1989年、税込550円)

この本は、1964年12月に、中央出版社(サンパウロの前身)から単行本として出版され、1970年に改訂されたものです。72年4月には、続編として『続イエズス―福音の反映』(現在は絶版)が出されています。著者は第一次世界大戦の後、東方教会で修道士となった人ですが、自分の名前を明かしていません。

この本を勧める理由は、私がまだ社会人として働いていた時、日頃の生活に心身共に疲れてしまった時に、心の糧としてしばしば紐解いていた本だからです。今でも、自分自身を振り返りたい時、日々の黙想

や黙想会の時などに、しばしば用いています。

「聖書を知らないことは、神を知らないこと」と言われていますが、なかなか聖書に親しもうと思っていない、忙しい日々の中では、聖書を読んでいることは難しいのではないかと思います。その点、この本はほんの少しの時間でも、立ち止まって素直に自分を見つめ、心を開こうとする人には、イエズス御自身が語りかけてくださっているような感じを持つことができます。

本書は46の部分に分かれています。順番にこだわらず、どの部分を拾い読みしても良いと思います。全体のテーマとしては、イエズの生涯とその弟子に呼びかけられる「私に従いなさい」という言葉ですが、その時々自分の心に響く声

が聞こえてくるのではないかと思います。少し本文から引用してみたいと思います。

『私に従え』。イエズスが、弟子になるべき者に向けられる、最も普通の呼びかけの言葉は、これである。……それは、私に従うこと、ついて来ることである(13頁)。

『私に従え』。これは、福音書が示す、イエズスの最後の言葉である。これは、湖のほとりでペトロに言われた最初のみ言葉であり、同じく湖のほとりで彼に言われた最後のみ言葉である。この言葉は、すべてを含んでいる(46頁)。

ぜひ一読をお勧めします。

次回は、竹延真治神父様(今市教会)です。

聖ヨセフとわたし

12月8日で終わる「ヨセフ年」。本コラム発案者の前田万葉大司教様に、聖ヨセフに関する自身の気づきをシェアしていただき、本コラムを終える。



前田万葉大司教

幼いころ

「イエズス・マリア・ヨセフ!」の呼称は、「父と子と聖霊のみ名によって、アーメン」の十字架を切ることと同じぐらいに、祈っていました。イエズスさま、マリアさま、ヨセフさまの聖家族への信心が、クリスマスの馬小屋信心とともに、幼心に植え付けられていたのでしょう。また、大抵の教会では、本祭壇に向かって、右祭壇に「聖母マリアさま像」が、左祭壇に「聖ヨセフさま像」が飾られていました。わたしたちの「お父さん」というイメージです。

大人になって

「眠る聖ヨセフのご像信心」は神学校に入り、聖書を勉強し、神学を修めるにつれて徐々に芽生えてきました。神は、太祖ヨセフ(創世記37・5～11)や聖ヨセフ(マタイ1・20、2・13、2・19～23)の場合のように、夢を通して語りかけ、ご自分の望みを果たされました。「眠る聖ヨセフのご像」の下に願いごとを書いた紙を敷いて、聖ヨセフの取り次ぎを願う信心のことも理解できるようになりました。

三月のイエズスマリアヨセフさま

わたしの司祭叙階祈念日は、1975年3月19日、聖ヨセフの祭日です。ヨセフ年を過ごしながら、「眠る聖ヨセフの信心」から、「聖ヨセフの従順」をあらためて見習いたいと思います。マリアさまの「お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ1・38)や聖ペトロの「お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」(ルカ5・5)の聖句を「眠る聖ヨセフのご像」の下に敷いて。

